

今年は脚折雨乞の年

もう準備が始まっています！

問合先 生涯学習課文化財担当 ☎049・285・2194



写真：新達也さん

脚折雨乞は、国選択無形民俗文化財、市指定無形文化財に指定される江戸時代から継承されてきた伝統行事ですが、昭和39年を最後に一度途切れてしまいました。しかし、行事によって生まれる地域の絆を大切に思う住民によって「脚折雨乞行事保存会」が組織され、昭和51年に復活、以来現在まで大切に保存継承されています。

脚折雨乞の特徴は、長さ36メートル、重さ3トンもある「龍蛇」を作って雨乞いを行うことです。龍蛇は、白鬚神社前で麦わらと孟宗竹、荒縄によって作られます。雨乞行事当日、出発前の入魂の儀により「龍神」となります。この巨大な龍神を、300人の男たちが雷電池までの約2キロメートルを担いで練り歩きます。雷電池に到着すると、龍神を池に入れて、「雨降れたんじゃく、ここに懸かれ黒雲」と必死に叫び雨乞いを行います。雨乞行事は、池の中でクライマックスに達します。最後は龍神を一齐に解体。頭部に付けられた金色の宝珠を、我先にと競って奪い合う様子は、非常に豪快で見守る者も圧倒されます。



平成 27 年 12 月
龍蛇の骨格となる竹の切り出し



平成 27 年 11 月
龍蛇の胴体に使う麦の種まき



平成 27 年 8 月
龍蛇製作講習会で、工程を確認

脚折雨乞と

川崎平右衛門



かわさきへいもん
川崎平右衛門の肖像画

川崎平右衛門は、江戸幕府の8代将軍吉宗が行った『享保の改革』による新田開発に従事した代官で、鶴ヶ島を拠点として荒地の開墾を指導しました。

高倉地内にある史跡「川崎平右衛門陣屋跡」の石祠は、高倉をはじめ脚折新田や町屋新田など6ヶ村の農民たちが造立に参加し、川崎平右衛門への感謝の気持ちを含めて「川崎大明神」として祀ったものです。川崎平右衛門による新田開発が、脚折地域へも及んでいたことを示しています。

脚折地区で栽培されていた陸稲畑で育てる稲は、日照りが続く一番先に収穫への影響が懸念される作物であるため、脚折雨乞には、農家の切実な願いが込められていたことが分かります。